

図書館だより

93. 1

西域南道にて

清水 弘 (物理)

この秋、西域南道に行くことができた。西域南道は中国北西部の新疆、日本がすっぽり入りそうなタクラマカン砂漠の南縁を東西に走るシルクロードの一本である。崑崙山脈とタクラマカン砂漠の境界を細々と走るこの道は、かつて法顕や玄奘(三蔵法師)が天竺への長い取経の旅で通ったこともある流砂の道である。

タクラマカン砂漠とその周縁はまた、ヘディンの「さまよえる湖」を始めとする幾つかの考古学的探検や、更には宮沢賢治の「葱嶺先生の散歩」や「雁の童子」の舞台として若い頃から夢のような憧憬を抱いていた地だった。

「憧憬というものは、それを忘れずに抱き続け



ていると、いつの日か必ず実現するものだよ。」と昔、寮で先輩が話してくれたことがあったが、「西域行」はやはり夢のような話だった。

それが中国の王さんの計らいで、西域南道訪遊が突然実現した。王さんは中国科学院蘭州水

目	次
西域南道にて 清水弘 ----- 1	卒業生からのメッセージ ----- 7
次はあなたの番です — 卒論作成のために	亀井 志乃
卒業論文は終わらない 種田和加子 ----- 3	成田美津子
本の紹介『論文作法』 揚妻 祐樹 ----- 4	卒論・レポートと図書館の2次資料 --- 8
卒論に寄せて 小山 清文 ----- 5	見たり聞いたりAV資料 ----- 8
年中行事に寄せて 木村 信一 ----- 5	お知らせ ----- 10

河凍土研究所の教授で十年來の親友であり、西域南道の小さなオアシス策勒（チラ）での砂漠化防止研究計画に私を便乗させてくれた。

九月十六日、私達のジープはカシュガルを立ち、凸凹な簡易舗装の現代版西域南道をまず南東に向かってひた走った。見える限り真直ぐに伸びている西域南道の南側には崑崙の山なみが横たわり、北側にはタクラマカン砂漠が荒涼と拡がっていたが、緑のものは何もなかった。遠くの砂嵐のせいか、タクラマカン側の空は妙に薄曇り、まぶしくない白い日輪がくっきり見えた。行き交うものも稀な索漠とした道を、たまに、耳の大きなロバに曳かせた荷車にウイグルの老人が腰かけて悠々とやって来たりした。

中国語で緑洲と呼ぶオアシスは、茶色の荒涼の中に忽然と現われる正に「小さな緑の島」だった。それは夥しい数のポプラの集団で、灌漑用の水路がその根元を巡っていた。その水源は崑崙山脈の氷河だという。家も堀も土造りで、髪をスカーフでまとめたウイグル矢がすりの女の子がはだしで遊んでいた。異郷の地だった。

二日目のお昼時、ホータンの手前の小さなオアシスのイスラム食堂に入った。私達はテーブルについて、昼食の到来を待った。ところが、私の隣に座ったタジク族の友人がちょっと席を外している間に、小さなでき事が起きた。

まず、ウイグル矢がすりにハダシ姿のウェイトレスが真直ぐやって来た。そして私の隣のあるじ不在の友人の湯呑みを黙って取り上げると、飲みさしの茶を土間にさっと捨て、その湯呑みをそのまま隣のテーブルの新しい客の前に置いた。客は注がれた茶を悠然と飲んだ。

間もなく戻って来た友人は、自分の湯呑みが無くなっているのがウェイトレスを呼んだ。彼女はすぐ別の湯呑みを持ってきたが、さっきの出来ごとから見れば何処から持ってきたのか知れたものではなかった。そして言葉をはさむ暇

もなく、友人はその茶を飲みはじめた。

これらの寸劇からすると、私たちの湯呑みだってその素性は判ったものではなかった。（しかし、そんな事を気にしていたら、ここでは生きて行けないのだ・・・）と思った。

チラの近くに巨大な砂丘があった。ジープを乗り入れてその裾まで行き、50メートル位の峰に登ってみた。砂丘の砂は細かく、さらさらして裸足で歩くと快かった。頂上に着いてみると砂丘は更に高く低く波打って、果てしなく拡がっていた。強風が吹くと砂嵐が巻き起こり、あたり一面真っ暗になるという。ウイグルの人はカラブラン（黒い嵐）と呼んで恐れる。黒い嵐により砂丘は何物をも埋め尽くしながら風下に移動して行く。チラのオアシスも今までに三回砂丘に埋められ、その都度住民は命カラガラ逃げだしたという。今も西域南道周縁には、数多くの古代都市が砂漠の中に埋没している。

井上靖の「楼蘭」はタクラマカン砂漠の東端ロプノール（さまよえる湖）の湖畔に嘗て栄えたオアシス都市の興亡の歴史小説である。その終幕は、鄯善（楼蘭）軍と夷狄の攻防戦の最中に黒い嵐が巻き起こり、三日三晩続いた砂嵐は人も、馬も、ラクダも埋め尽くし、楼蘭城も半ば埋めたとされている。凄惨な終幕だと思った。

しかし玄奘やハイデルの文章に「天から砂が降りだして」に始まり、「地面が凄惨な勢いで盛り上がってきて」、「町全体がゆっくりと姿を消していった」等とあるのを後から見て、（これは事実なんだ）と改めてその凄さを思った。

最近、このチラの付近では砂が増えているようだという。不気味な話である。ところがこの大砂丘を歩いていて、5センチくらい小さなトカゲが乾いた砂の上をチョロチョロ走っていたり、根を地下水位まで30メートルも延ばしてシブトク生き続けているタマリスク（檉柳）の幼木を見た。こんな場所で、こんな風に一生懸命生きていく生命がある・・・と感嘆があった。

次はあなたの番です — 卒論作成のために

卒業論文は終わらない



国文科 種田和加子

十一月のこの時期、卒業論文の締め切りを目前に苦しんでいる学生と話などしていると、わが卒業論文を思いださないわけにはいかず、過ぎたこととはいえ、それはあまり、よい気分にはなれないものである。卒業論文がもし、よい出来映えであったなら、大学院にすすもうなどとは思わず、別の道をとっていたかもしれない。それほど主観的にも客観的にもさえない代物が私の卒業論文であった。ちなみに、提出したのは夏目漱石、「こゝろ」と「行人」二つの作品論である。ベルグソンやエーリッヒ・フロムを使って「行人」における一郎の認識方法を分析したところは多少まじったような気もするが、そもそも、対象の選び方自体がまちがっていたな、と気がついていても変えるのは手遅れ、しまった、などとまったく引き裂かれた状態で取り組むのだからやっけて面白いわげがなかった。

自分にあった対象を見だして論文を書き、それでだめだったらあきらめよう、と思って大学院へ行った。泉鏡花で修士論文をと決めるまでまた時間がかかり、四年目というぎりぎりですごした。今は、鏡花という研究対象に迷いはないが、方法論では論文を書くごとに壁がたちはだかり、心やすまる時はない。他の作家を手がけてみて、また、鏡花にもどろうと思案中である。

書けることのみが、ほんとうにわかっていることで、会話は受け売りでハッキリがきいても書いたものはごまかしが一切通用しない。しかも、自分が自分の質を保証するものなので、疑いだしたらきりがなく、いつまでたっても仕上

がらないだろう。そこを、どこで踏み切るか。現在は有無をいわさぬ締め切りという「ありがたい」期限もあり、それにあわせて自己限定してしまうので逡巡することは少なくなったが、それは、怠慢と裏腹で、危険なことではある。

卒論のときは、「真面目」だったので、ほんとうに最後まで確信がもてなかった。確信というのは、その時点の自分の能力で対象への切りこみにこの方法がもっとも有効であると納得し、それが立体的に展開できたかどうかで生じてくるものだ。簡単にいえば、知が徹底したか、ということ。私の卒論はまったく知の徹底にはいたっていなかった。しかし、落ちこんだ気持ちで自分と会話をした。「提出しなければよかったか。」答えは「ノー」。最低のところを基準をとれば、自分の蓄積の貧しさ、対象とのインティマシーの薄さ、論理の脆弱さ、それらがすべてわかったのである。そこを起点にたちあがろう、と。研究は常なる片思いのようなものだから、かろうじて立ちあがったものの、その先もたいして明るくはなかったのは、実に誤算であった。

論文はごまかしがきかない。底の浅い人間はそれをすべてさらけ出す。そういうものに、一度挑んでみる。二十一、二才くらいで視るものはたかがしれているとかつては思い、経験を積まなくては文学はわからない、とくに漱石のような大人の小説は、とひねくれていたが、年をとればものが視えると思うのは幻想である。中身は幼稚でも問題意識の核のようなものは卒論の時点で決まったと感じることもある。私が読みたい卒業論文は書き手の精神の白熱が感じられるもの。その人が思考してきた、と思わせてくれるもの。学生時代の自分を欄にあげての願望だが、それは、現在の私自身への切実な願望の投影にほかならない。

本の紹介

『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』

ウンベルト・エコ著、谷口勇訳

而立書房 1991 1957円



国文科 揚妻祐樹

ウンベルト・エコは、イタリア出身の世界的な記号学の権威で、また彼の書いた小説『薔薇の名前』は全世界的ベストセラーになり、映画化もされた（主演ショーン・コネリー）。さてそのエコが、イタリアの大学生向けに、『論文作法』なる本を書いている。ここでエコは、初版まえがきに次のように書いている。

昔は大学がエリートの大学だった。大学に通うのは学士の子息だけで、稀な例外をのぞき、学生は必要なだけ四六時中、勉学に打ち込めた。大学は静かに没頭できる場所と考えられていた。

（中略）だが、イタリアの大学は今や大衆の大学に成り果てている。あらゆるタイプの中学・高校教育を受けた、あらゆる階級の学生が大学に押し寄せている。学生によっては、ギリシャ語はおろか、ラテン語すら修めたことのない、工業学校を卒業しながら、哲学とか古典文献学を専攻するものさえいる。

こういう学生事情は日本も同じであろう。多くの「論文の書き方」の中でこの本の特徴付けるのは、こうした現在の大学生の社会的・心理的背景に立ち入ってかかれているところである。

たとえば大学の学生生活が4年間であるということ（とくに専門的な教育を受けるのは後半の2年間）を考慮し、「2年間で何ができるか」という問題意識がそこここにうかがわれる。もっとも、「私見では、大学2年生の終わりごろに（各自の指導教官と相談して）論題を選ぶのが望ましいと思う。この時分にはもうすでにさまざまな科目に精通しており、まだ試験を受け

ていないいろいろな学科の状況や、難しさや、テーマすらも知っていることであろう」等、藤の実態にはそぐわないことも書いてあったりするが。

章立を見ても、「卒業論文とはなにか。何に役に立つか」「テーマの選び方」

「資料調査」

「作業計画とカード整理」「原稿作成」「決定稿の作成」「むすび」と懇切丁寧なかぎり。しかし、実際にここに書かれた通りの理想的な手順で卒業論文を書いた人がいたらお目にかかりたいものである。私自身の卒論をふりかえってみても……大雑把にテーマを決め計画もたてずに部屋に山積みになった論文のコピーを手当たり次第読みまくり、いつまで経ってもその山が低くならないのでイライラし、人の論文を読んでいるだけではちっとも自分の論文が出来上がらないと思い、さて何をしようかと思い、用例のカードでもとるかカードをとり始め、ある理論を思いつき、書き出してよく見ると、なんとさっき読んだ論文の内容と同じことを考えていることに気付いてがっかりし、また論文のメモを取っておくんだと後悔し……要するに誠に要領が悪かったのであります。

この本に書かれたことをそっくりそのまま実行するのは難しい。しかし、ここに書かれた精神は汲み取りたい。論文は、アイディアの善し悪しとか理論的洞察力の深淺のほか、書く技術の有無で出来が左右されるのである。意余って言葉足りず、ということがあがる。卒論で十分意を尽くすために、一読お薦めしたい本である。



卒論に寄せて ～よしなしごと～

国文科 小山清文

目下、四年生の卒論指導の渦中、そこで常々学生に注意していることなどをあらあ書きとどめておこうと思う。

まずは、卒業論文が自主的に自由にテーマを選択できるということとその意味を再認識するところから始めてほしい。現状において、卒論以外は他人からテーマを与えられそれに応えるのがほとんどであるのに対し、卒論は自分自身が自由にテーマを選び定めることができるほぼ唯一の機会なのである。それは自由に設けることができるものであると同時に、責任をもって定めていかなければならないものでもある。

また、テーマ設定とは扱う作品や作家などを決めることなのではなく、さらにそれらに対しいかなる問題意識をもってのぞむのか、それらの何を問題にしたいのかを問うことに他ならないだろう。とりあえず、何らかの問題意識をもつこと、それが本来の論の出発点であり、それがなければ論のおおよその行方を展望することすらできまい。そして多くはこの問題意識がいまいのままに四苦八苦しているようだ。たとえば、ある作品を対象として扱う場合、読後の印象を大切に、なぜそう感じるのか、ということから辿り始めればよい。なぜ？ 何が？ という問いかけが大事だと思う。

さらに、自分の読みを示すこと、新しい意見を提示できるにこしたことはないが、必ずしもその必要はない。他人の論を参考するにしても、それに対しただ安易に賛否を唱えるのではなく、なぜそのように判断するのかという考えを提示することによって自らの論の中に主体的・能動的にそれを組みこんでいくことが必要である。受け売りではなく、あくまでも自分自身が研究対象とどのように関わり合ったか、そのプロセスを報告することに意味がある。人によって考え方はさまざまだろうが、私はむしろ他人の論

文はどうでもいいから（という言い過ぎで、ほどほどにして、ということ）作品そのものをじっくり読みこむことをおすすめする。古典作品の場合はもちろん原文をである。たとえば、谷崎訳の源氏に基づく源氏論はあくまでも谷崎源氏論にしかならないのであるから。

論じていく際の注意としては、他人に理解してもらえるように読みや考えの根拠をしっかりと具体的に示すことが不可欠である。印象読み、思惟的・独断的読みであるとのそしりをさけ、エッセイ風に陥らないようにするには、そして他人に理解させるには根拠をもって論説するよりほかない。

大まかな論の構成はおおよそ次のようになろうか。序において、何について論じるか、問題意識をうち出し、本論でそれを受けて筋道立てて検討・考察を具体的に加え、結びではとりあえずのまとめをおこなう。設定したテーマによっては結論にまで辿りつかず中間報告めいたものになってしまう場合もあってよいわけで、あくまでも問題意識にそった読みの経過、考察の過程の一報告でよいと思うし、むしろその方が自然であろう。論理を飛び越してなおざりの結論にはしるよりは、次なるテーマを見据えて締めくくる方がはるかに好ましい。論じていくうちに新たな次なるテーマを発見できてこそ論じる甲斐があるというものだ。

わざわざここに言い立てるほどのことでもないことを書いてしまったが、目下卒論指導に四苦八苦している一新米教員の学生に宛てた呟きとして読んでいただければ幸いである。



年中行事に寄せて

英文科 木村信一

思うに卒論を書くというのは、卒業という実生活上の一大事が



そのことに掛かっているという点で、ユニークないわば擬似職業作家的体験です。だからこそ卒論は己の人生を賭けるといった乾坤一擲の心意気で書かれることになる。今日でも卒論という言葉を目にすると「みぞおちをどやされるような」切実に生活的な危機感を覚えるのはそのせいかも知れません。

これはつまり、卒論も各自の利害に絡めて書かれかつ読まれるものである以上、特定の読み手を目掛けて仕掛けられる説得工作なのだということです。この説得工作は強いて分けると二つの目標に関わっている。一つは卒業証書を手に入れるという即物的狙い。もう一つは、他のあらゆる論文と同様、ある主題について書き手の見解を読み手に説得するという修辭的狙い。本来この二つの目標は一つになるべきものです。ある主題において読み手を説得することがそのまま卒業を勝ち取ることである。勿論こうした物言いの胡散臭さもまた否定しがたい。自分の卒論を振り返ってみても、世の建前と内実の不一致あればこそ、自分の浮かぶ瀬もあったのだと認めざるを得ません。しかしながらこの間の事情には、今一つ説得という出来事自体が持つある種の気難しさというものも、随分深く関与しているのではないかと思うのです。

説得とは、実質上テキストとその読み手との間に生起する事態とも言えますが、理念的には書き手と読み手との間に成立すべき出来事であり、ある物言いに強い説得性を与えるコンテキストが、書き手と読み手の中に同時に形作られて初めて、ある説得が成就する。しかしながら書き手と読み手とが同じコンテキストを共有するというのは、実は非常に幸運な、或いは非常に不運な場合に限られます。実際には読み手は、書き手の意図とは全然別のところで、勝手気儘に説得されたりされなかつたりする。基本的に読み手は極めて独裁的かつ無自覚に取捨選択の権利を行使します。自分に馴染のない

あらゆる修辭的回路から自分を絶縁して、何としても説得されまいとする読み手を説得するのは至難の業です。勿論実情をよく知る読み手ならば、とりあえずは相手の土俵で相撲を取ろうとし、書き手が寄り添うコンテキストへと自らも擦り寄ろうとする。とりわけ卒論の読み手はそれぞれに今日・此処とは異なった文化に属する歴史的なテキストの読み手でもあり、その都度有効なコンテキストを模索しながら読み進むことを苦にしません。とはいうものの所詮この種のゲームでは、切り札は常に読み手の側にあり、自分の側の持ち札といえど運に効果不確定で危いものだという事実を、書き手としてまずはしたたかに受け入れる他ないのです。

ある物言いの説得力は、それが書き手自身の本音である程度に従って増したり減ったりする訳ではない。強引にこじつけた議論であっても、偶々うまい具合に読み手の欲望につけ入ってしまえば、どんなに力瘤の入った正論よりも遥かに大きな説得力を行使したりする。となればここで必要なのは、状況の不利を逆手にとるだけの書き手の心意気なのかも知れません。自分たちを締め付ける拘束服（例えば本音とか感動とか正論とか）の破れ目を突いて書いてみる。となれば、こじつけの要素がそこに入り込むのは当然の成り行きですが、そもそも卒論を書くに当たって「信念の人」になる必要はないのです。確かにこの間の事情はなかなか厄介で、私自身言うほど割り切るつもりもありません。ただこじつけが本音に勝る一つの点は、本音は結局一つ二つしかないけれども、こじつけには無数の変奏がありうるということです。例えばジャズの聴き手を手玉に取るのがこの変奏の妙であることを思えば、読み手の素朴さを嘲る程にしたたかな変奏の説得力をこそ、年中行事である卒論にはとりわけ期待したいのです。

(似顔絵 原田伸子)



message

卒業生からのメッセージ



文国卒業生 亀井志乃

四年間の締めくくりの卒業論文のテーマを宮沢賢治に決めてから、早や七年余、縁あってか今また賢治作品と取り組む日々をおくっています。思えば長いおつき合いとなりました。

何もこの道一筋を気取ったわけではないのです。ただ、大学院進学など一旦完全にあきらめていた教師生活の三年間も、気づいてみれば、卒論のために勉強した事柄に助けられていた局面がいくつもあったように思います。それは、私が国語科担当だったからではありません。賢治という人はまた精神のフィールドが無闇に広く、そのために思想書から宗教書、果ては化学や鉱物の本まで、あたふたと手を広げて読み漁ったのですが、結果的にはそのおかげで、他領域を専門とする人の発想も、おぼろ気ながら見当がつくようになったのです。それだけでなく、どんな馴染みのない世界の話でも、拒絶反応を起こさずに、それなりに面白く聞けるようになったのも、やはり賢治研究で、意外な話に対する度胸ができたおかげだと思います。

考えて見ればあの卒論の頃私が読んでいたのは、およそ<文学>とは直接関わりのないものばかりでしたが、何も無駄になるものはないのだなあと、卒業した後の私は色々な所で感心する事しきりでした。無論文学そのものもです。

かえって、労力の無駄をはぶき、狭い範囲を、必要最小限調査するようなやり方だと、結果的には後の実りには何も結びつかない、本当の意味で<無駄>な、時間の浪費だけをしてしまうように思われます。

それにしても卒業してから賢治の魅力を見直す事頻りで、せめて全集を手元においておきたいと、少ない給料からローンで買い揃えておいたものが、今現在、役に立っているというのも不思議なものです。全集本の青い表紙をめくる

時、ふと、大学の図書館で過ごした日々からこのかたを思い出したりするのです。



文英卒業生 成田美津子

卒論という思い出すが、寒くて暗い冬の夕暮に閉館の鐘が鳴るまで図書館に残っていたことです。

私の場合、英語学、それも歴史的な観点から英語という言葉の研究したかったので、チョーサーの英語について調べることにしました。決めた時期は4月ぐらいです。漠然と作家や作品が決まっても、どういった切口から調べたらよいか迷う人も多いと思いますが、私は各大学の紀要を参考にしました。図書館には沢山の大学の紀要がありますし、個々の研究タイトルをまとめた研究業績目録のようなものもあります。迷ったらまずこの作家についてはどのような研究がなされているのか、どういった視点が注目されているのかを調べてみてはどうでしょうか。(先生の中には独創性が失われると反対される方もいるかもしれませんが……)いくつかの研究論文を読んでいくと、少しずつ自分のイメージが湧いてくると同時に、その紀要の参考文献を見ると、どのような本を調べればよいかわかってくると思います。

普段は気付かないかもしれませんが、藤大学には併設している書庫以外にも、沢山の名著が眠っている？書庫が別にありとても書籍は豊富です。それでも見つからない時は、他大学の図書館へ行ったり、他の図書館から必要な部分のコピーを取り寄せることもできます。こういった資料収集に案外時間がかかるので、先生方は「早く始めなさい。」とうるさく言うのかもしれない。

結局振り返ってみると、私が卒論を通して学んだことは、研究内容自体よりも、資料収集や図書館の利用の仕方の方が大きかったと思います。

卒論・レポート と

図書館の2次資料



VIDEO CD TAPE
見たり聞いたり
AV資料

皆さんは卒論・レポートの作成の際、図書館を有効に利用していますか？

当館では閲覧室・書庫内の図書や雑誌を自由に利用できる全開架制を取っております。使いやすいと好評なこのシステムですが、利用者の皆さんが図書館の資料の探し方をよく知っていると思いついてしまう傾向がみられるようです。

たとえば、ある作家の特定の作品についてレポートを作成するとき、その作家の作品の並んでいる書架の資料（1次資料といいます）だけを見て図書館にはこれしかないと思っていないでしょうか？

作家の著作・研究文献のリストである書誌、雑誌に掲載された研究論文のリスト、年鑑の文献目録・書誌など（調べるための資料を2次資料といいます）を、資料を探す道具として是非使って欲しいものです。これらを用いると、雑誌に掲載された作家論・作品論も探し出すことができます。これらの2次資料をご存知ですか？

調査・案内カウンターでは図書館を効率的に利用していただくために資料の探し方・使い方、2次資料の紹介を中心としたガイダンスを行っています。卒論のためには、論文に関わる作家・作品の所蔵資料、文献目録、書誌類を紹介しています。

ガイダンスは火曜と木曜の午後に行っています。所要時間は1～2時間程度です。個人でも少人数のグループでも受付していますので前日までに申し込んでください。「もっと早い時期に知っていれば助かったのに」という3～4年生の感想も聞きます。1・2年生の皆さんもどうぞご利用ください。

私達の身近な記録は、昭和史と思います。大きな戦争をはさんで、どの家でも2代3代の、困難な足跡を残しました。国も家族や個人も、かつて見られぬ変化を、直接経験致しました。

映像でつづる昭和の記録は、この昭和の歩みを刻明に再現します。とりわけ大正15年から昭和20年までは、

学生の皆さんには、想像も出来ない国の歩み人びとの暮し、であったと思います。飢えがあり、言論も思想も信仰すらも統制され、何よりも軍が存在した。



NHKと朝日新聞は、当時のニュース映画、外国のフィルムなどを集め、歴大な資料を整理して、32時間のビデオテープを編集しました。

月並な表現ですが、激動の記録と呼ぶにふさわしいものです。戦前は軍事国防、戦後は産業経済が、この民族のすべてである印象が強いのですが、藪入りの浅草のにぎわい、早慶戦や美空ひばりに熱狂するファンに、年代に関りない庶民の姿が見られます。

いまは、テンポの早い時代で、たった5年前でも、もう流れてしまいます。しかし戦争とその前後を、また自分が生れた頃を、学生に見詰めて欲しい気持ちがあります。

テープを整理しながら、32本をモニターで眺めると、あんなことがあったのかとか、この時は全くこの通りだったのかと思いました。そんな思いの横を、突然、虚像の記録という言葉が駆け抜けたのは、どうしたことなのか。

昭和から、中古・中世に戻ります。

古写・古版物語文学総覧は、旧久原文庫から、大東急記念文庫所蔵の貴重な典籍95点を選んでマイクロフィルム(35ミリ・ポジ)80リールに複製したものです。この分野でスタートの早い雄松堂書店が、頑張って製作に当り、昭和47年という時期としては、画面も明るいいし、歪みも目立たない。マイクロリーダーの操作になれると、写真版や複製本とは違った趣きです。

取められた695冊は、室町・鎌倉の稀覯書から、江戸末期の学者の書入本まで、範囲を広く押えた物語文学から、隨筆、日記、紀行に及んだもので、専門の研究者でも閲読する機会を得られぬものが多く含まれます。

天正9年写本(54冊)、嵯峨本など10種を越える源氏物語。延慶本、慶長写本、慶長古活字版の平家などは、そのあたりを専攻する学生は当然、他の時代を学ぶ人も、何度かリールを廻してはどうでしょう。保元物語の図絵が、目に飛び込んでくると、やっぱり「あゝ」と思います。5本も10本もリールを廻していると、黒黒とした字面の中に、麗しいとか艶やかとかの想いが重なったりもします。

編集は、川瀬一馬博士が自身で当り、大東急記念文庫所蔵の原本による江戸文学総覧に次いで、時代を溯上して企画されたものです。

同じ系列の資料では、もっと範囲の広がった静嘉堂文庫所蔵物語文学書集成や歌学資料集成があります。中央公論や新潮のマイクロ資料は他の大学からも、時折のぞきに來るのですが、占領軍検閲雑誌の資料価値はあまり知られていない様子です。

Voice of America というテープですが、アメリカの国策として製作され、多くのデパートメントで構成されます。中に American novel series や、Contemporary American poetry series など文学関係も含まれ、館にも数十本所蔵されます。大学の初期に、占領軍(アメリカ文化セ

ンター)から譲り受けたものです。当時は世の中に、今ほどAV資料があふれず貴重でした。America's literary heritageなどを大切に借りた先生方やシスターが、目に浮ぶのです。もう利用者も無く、係の手当も無く、部分的には転磁(写)現象を起したテープもあり、ためらいましたが、図書館の或る時代のスナップとして、記してみました。どれかに金属的な肉声?でT. S. エリオットがしゃべるのです。

長崎の信仰、奇跡のルルド、教皇ヨハネ・パウロⅡ世とともになどのビデオ、CD聖書や、冨澤孝彦司教のテープキリストの聖体など、カトリックの大学らしい資料が見られます。これからも特色になるでしょう。

予算など図書館の事情のため、AV資料の数も少なく、まだまだの感じがあります。花川館は開設初年ということで、語学テープが30本足らずですが、こゝは年度毎に周辺機器が整備されるし、伴って資料も増加致します。

レーザーディスクとかビデオディスク、電子ブックなど新しい形式、素材の資料が出てきます。その特性を生かした利用が期待されます。

例外もありますが、AV資料は消耗品です。百万円のマイクロフィルムでも、消耗破損しますし、オーディオもビデオもテープ利用に限度があります。資料に適した方法で扱い、フランソワーズ・アルディやシルヴィ・バルタンの歌声を、何時までも美しく残したいものです。

AV資料は、閲覧室の分類目録の最後にカードが並んでいます。(整理部視聴覚資料担当)

新規購入雑誌

- 本館 『月刊マインド・トゥディ』
『ことば・こころ』
花川館 『週刊時事』『教職課程』
『たしかな目』

花川館

♪♪♪ 各館からのお便りです ♪♪♪

新緑萌える5月に開館。5人総力あげての日々はあっという間。窓越しに手稲山の白い姿を間近に見ながら、花川館から近況報告とお知らせを。

閲覧席が増えました。7月末に新たに閲覧テーブル14台と追って椅子が64個入りました。やはり窓側とキャレルが好まれるよう。みなさん静かに利用しています。今年もまたテーブル10台と椅子32個が入る予定です。

大学祭では「藤ツアー」に参加。札幌市内の高校生28名が熱心に見学。コンピューター検索を興味深そうにのぞいていました。

購入希望図書が入ってきました。みなさんの希望が反映された本が、少しずつ書架に並ぶよ

うになるでしょう。これからもみなさんのリクエストをお待ちしています。

道立図書館の資料も借りることができます。本学図書館に所蔵していない資料の、調査や申込等は係までどうぞ。

ここでちょっと本学所蔵のコンピューター検索(FUJI-MARC)について…未収録の文学部門については、現在データを作成中です。もうしばらくお待ちください。

最後に今年新しくできる施設のお知らせ。参考図書コーナーそばに視聴覚コーナーが設置されます。ビデオ、CD、カセットが視聴できる機器が入ります。どうぞお楽しみに。☆

本館

“読書の秋”も過ぎ去って、家の中にこもりがちな季節がやってきました。そこで、ちょっと皆さんに人気のある資料を紹介したいと思います。

まず、ここ何年か根強い人気を獲得しているのは、“村上春樹”、“山田詠美”の著書ですね。そして、“三浦綾子”、“遠藤周作”の作品も、映画の影響か、“マルク・リュッセル”の図書も貸し出しが多いようです。書名を、たとえば…何をおいても、1番にあがるのは、

「アルジャーノンに花束を」

「5番目のサリー」ダニエル・キズ著

最近の本では、

「イギリスはおいしい」

「イギリスは愉快だ」林望著

「受け月」伊集院静著

なども出ています。

ちょっと変わったところでは、

“おりがみ”という雑誌も、保

育科の学生さんを中心に貸し出

しが多いです。他の科の方も、

子供の頃を思い出して、たまに

は折り紙を折ってみるのも、気

分転換にもなって良いかもしれ

ませんね。

ところで、図書館の本をたく

さん借りて下さることは、喜ばしいことなのですが、ここで1つ**注意**!!

最近、図書館の本を紛失した、という届けがよくあります。教室の机の中に置き忘れた、ということが多いようですが、なかにはどこに忘れてきたかわからない、などという無責任な方もいるようです。今一度、本を借りる時の心構えをチェックしてみてもどうでしょうか。せっかく借りた本なのに、寂しい思いをさせないように…

藤女子大学 図書館だより 第42号 1993.1.8
藤女子短期大学

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館
TEL 011-736-0311(代) FAX 011-709-4770

